

時代を超えるメッセージ —古建築から学ぶ人間の知恵—

河 辺 泰 宏 (都市環境デザイン領域)

スカイツリーも五重塔から生まれた

建築学を専門とする河辺泰宏教授は国内外の建築物やその歴史を取り上げ、「昔の人や建築に何を学ぶのか、今の人は一体何ができるのか」を問いかけました。地域別のトピックスで展開された今回の講演。まずは日本の耐震建築についてのお話から始まりました。1968年に誕生した日本初の超高層ビル「霞が関ビル」には、五重塔からヒントを得た柔構造という耐震設計が使用されました。五重塔は心柱という中央の堅い柱を虫籠のような形をした細く柔らかい素材が取り囲むような構造をしています。これが地震の横揺れによる負荷を分散させるという地震大国だからこそ生まれた伝統的な耐震構造です。近年ではスカイツリーやあべのハルカスなどにも類似の構造が使用され、古来の日本人が生み出した知恵が現代に息づいていることが伺えます。

コーランが導く最先端エコロジー都市

次のトピックスは、アラブ地域の事例です。イスラム教の聖典コーランには、街づくりの規則を記した説があります。それによって道の幅や住居の窓の高さまで事細かに決められています。モロッコの街も例外ではなく、コーランの記載に従って街中に細い路地がはりめぐらされ、その両脇には住宅がひしめいています。実は、これは灼熱のアラブ地域では理にかなった構造です。住宅によって路地への日光が遮られ、暑さが軽減されるからです。さらに、住居内も通風面などが計算された快適な造りになっています。現在、アラブ首長国連邦の首都アブダビでは、このような伝統的な知恵を取り入れた二酸化炭素を輩出しないゼロカーボンシティ「マスタートール・シティ」の開発が進んでいます。そこでは再生可能エネルギーで全ての電力供給をまかなうと同時に、昔ながらの知恵を用いて電力に頼らない環境快適性を追求しています。

400年の時を越えて建築を学ぶ

ここまでは昔からの建築の知恵を現代にどう活かすかを追ってきましたが、最後に昔の建築家が未来の建築家をどう思っていたかをうかがい知れる事例を紹介します。16世紀のオスマン帝国で活躍した宮廷建築家にシナンという人物がいました。1990年代、彼が400年前に造ったモスクの修復が行われました。その際、修復スタッフがアーチ部分の石を取り外したところ、石のなかから手紙の入った壺を発見。なんとその手紙はシナン直筆のもので、『未来では建築技術が進んでいるが故に、400年前の建物の修復方法が分からないだろう。そこで修復方法の資料を同封する』という旨が記されていました。シナンの予測は当たり、資料を元にして修復は行われました。この稀有な事例は、時を越えて建築家同士は学び合えることを示しています。